

潜在的態度に関する近年の研究の諸理論

沖林洋平・藤田理恵*

Theories of recent researches on implicit attitude

OKIBAYASHI Yohei, FUJITA Rie

(Received September 27, 2013)

問題と目的

本研究の目的は、潜在的過程に関する近年の研究を概観することにある。潜在的過程に関する研究は、認知心理学における古典的な問題であったが、近年、態度研究の側面から、潜在的過程に関する研究が進められるようになった。本研究では、それら潜在的態度の研究における諸理論を、主として測定的観点から概観するとともに、近年の著者らの研究の成果をまとめることにより、潜在的態度の研究について検討する。

認知心理学的観点では、問題解決は二重の過程により構成されると考えられてきた。認知心理学における問題解決過程では、情報処理過程における二重過程理論 (De News, W. 2006; Evans, J. St. B.T, 2003; Sloman, 1996; Stanovich, 2004) による問題解決過程の枠組みが提案されている。これは、直観的で問題解決に至るまでの時間が短いシステム1と、意識的で問題解決に至る時間がシステム1よりも長いシステム2による枠組みである。

このような思考の機能については、Stanovichも含めて、ヒューリスティックなどの演算処理が速く自動的な過程 (システム1) とモニタリングや批判的思考などの分析的過程 (システム2) の2つの過程による説明を試みる理論が提出されている (De News, W. 2006; Evans, J. St. B.T, 2003; Sloman, 1996; Stanovich, 2004)。例えば、Evans (2003) や Sloman (1996) は、システム1として自動的処理、システム2としてメンタルモデルの構築や将来の可能性のシミュレーションなどの仮説構築的思考を位置づけている。あるいは Stanovich (2004) は、システム1を日常生活における最適解の直観のような自動的な認知機構として TASS と呼び、システム2を TASS の出力を吟味、検討する過程として分析的システムと呼んでいる。

近年、態度に関する潜在的過程の研究が進められるようになり、従来では、意識的過程として位置づけられるものも、その潜在的過程を研究するアプローチが試みられるようになっていく (相川・藤井, 2011)。例えば、藤井・相川 (2011) では、態度の自己報告式測定における、社会的望ましきによる回答歪曲を回避した手法として IAT を位置づけ、Asendorpf et al. (2002) のシャイネスの二重分離モデルの検討している。その結果、早稲田シャイネススケール、称賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度に基づいて作成された自己報告式の他者評定尺度とシャイネス IAT には、潜在的自己意識を媒介として、対人緊張と他者評定シャイネスに影響を及ぼしていることを明らかにした。これは、従来、測定において社会的望ましきが影響を及ぼす顕在的自己意識として測定されてきたシャイネスについても二重過程として検討することがで

* 山口大学大学院教育学研究科

きることを示唆するものである。

Lane, Benaji, Nosek, & Greenwald (2007) は、彼ら自身による先行研究に基づいて、IATの一般的な手続きについて整理している。Lane et al (2007) は、IATを7つのステージにより構成されるとしている。基本的には、ターゲット語のグループ分け課題を通して、概念同士の組み合わせの違いから生まれる反応時間の差から、概念間の連合の強さを測定するものである。ステージ1では、画面の左側に Flower、右側に Insect と表示される。画面中央にターゲット語が提示され、参加者は、それが右側か左側に属するかを判断する。ステージ2では、左側に Good、右側に Bad が呈示される。ステージ3では右側に Flower と Good、左側に Insect と Bad が表示される。画面中央にターゲット語が呈示される。参加者はそれが右側か左側に属するかを判断する。ステージ4は、ステージ3と同様の課題である。ステージ5は、ステージ2の右側と左側に呈示される単語を入れ替えた。ステージ6、ステージ7は、それぞれステージ3、4の右側と左側に表示される単語を入れ替えた。IAT 得点とは、ステージ7の反応時間から、ステージ4の反応時間を減じたものである。

IAT では、2つの異なる質的処理が競合することによって生じる反応時間の差分が、それらの潜在的な連合の強度を示すと考えられているが、これを二重過程理論に対応させると、システム1、あるいは潜在的過程と位置づけることができる。

このように、潜在的態度を自己と他者、そして別の対立的概念との関連の強さを測定することにより、ターゲットに対する自己への潜在的連合強度を測定するのが IAT である。これにたいして、近年、Go/No-go Association Task (以下、「GNAT」) と呼ばれる潜在的態度の測定が行われるようになってきている。川上・吉田 (2011) によると、GNAT の成立過程及び手続きは次のようなものである。すなわち「ある共通の反応を行う場合、強く連合している項目にする方が、そうでないものに比べてパフォーマンスが優れるという反応競合課題 (response competition task) に基づき、対象と属性 (快・不快) 間での連合強度をその指標とする。例えば GNAT では、呈示される刺激項目が指定された対象と属性の2種類のカテゴリに当てはまるか否かを瞬間的に判断する弁別課題が、二つの組み合わせで行われる。一つは、連合の強い対象と属性同士が弁別対象となる組み合わせである (例えば、i 日本 ð と i 快 ð)。もう一つは、連合の弱いもの同士の組み合わせである (i 日本 ð と i 不快 ð)。ここで行われる具体的な課題としては、コンピューター画面に対象関連刺激 (例えば、i 京都 ði 広島 ði 上海 ði 北京 ð など) と属性関連刺激 (例えば、i 美 ði 好 ði 汚 ði 嫌 ð など) が、一つずつランダムな順序で連続して呈示される。そして、それらの各刺激が指定された組み合わせのカテゴリにそれぞれ当てはまるか (ターゲット)、あるいは当てはまらないか (ディストラクタ) を制限時間内にキー押しで弁別する (i 日本-快 ð ブロックの場合、キー押しすべき刺激は i 京都 ð、i 美 ð など)。この課題を前述の二つの組み合わせで行った場合には、連合が強い i 日本 ð と i 快 ð がターゲットとなる方が、i 日本 ð と i 不快 ð がターゲットとなる場合よりも、正答率が高いことが想定される。したがって、両組み合わせ課題の正答率の差分の大きさが、i 日本 ð というカテゴリが i 快 ð あるいは i 不快 ð のどちらと強く連合しているかという、潜在的な好意度の指標となる。近年では、このような潜在指標を実験の従属変数として用いた研究も多い。それらの研究を概観すると、顕在指標と潜在指標はそれぞれ異なるプロセスを経て変化するものとされる (Briñol, Petty, & McCaslin, 2009; Gawronski & Bodenhausen, 2006)。それによると、顕在指標は命題的 (propositional)、熟慮的 (deliberative) なプロセスを経て変化するのに対して、潜在指標は連合的 (associative)、自動的 (automatic) なプロセスを経て変化する。したがって、

闕下での評価的条件づけ (Grumm, Nestler, & von Collani, 2009) や接近回避行動の反復 (Kawakami, Steele, Cifa, Phills, & Dovidio, 2008) など、実験操作自体の意味が明確でない場合には、ルールベースの処理を反映する顕在指標よりも、対象への評価が連合強度の形で間接的に測定される潜在指標の方が、その影響を鋭敏に捉えやすい。すなわち、段階評定など刺激対象に対して直接的に言語的な評価を求める自己報告に依存しないため、より無意識的な影響が鋭敏に測定され得る (Gawronski & Bodenhausen, 2006)。』としている。いささか長い引用となったが、課題によっては、GNAT は IAT よりも、評定段階において、ターゲットに対する自己との潜在的連合強度を的確に測定することができることを示唆している。

著者らは、いくつかの研究において、主として IAT とその他の課題を組み合わせることにより、どのような課題がどのような潜在的態度を測定するのに適しているのかについて研究を行ってきた。そこで、著者らの研究をまとめることとしたい。

著者らの研究

尾崎 (2006) ではカード分類課題を用いた接近・回避行動の反復により、幾何学的図形に対する潜在的認知が変化することを検討した。その結果、事後の IAT において接近した対象はより肯定的な方向に、かつ回避した対象にはより否定的な方向に潜在的態度が変化した。また顕在的評価は事後で変化がなく、これは非評価的な判断をしながら動作を行ったことが要因として挙げられた。藤田・沖林 (2012) では、尾崎 (2006) の手続きにならぬ対象概念として用いた刺激語に対する潜在的認知が変化することを検討した。この実験では、カード分類課題と紙筆版 IAT で異なる刺激語を用い、各カテゴリに対し連想価の高い語を使用した。その結果、使用したカテゴリ語の組み合わせが対比的である条件において、部分的に接近・回避行動の効果が示された。これは、用いるカテゴリが相対的に評価されるという IAT の性質が要因として考えられる。また、川上・吉田 (2011) では、IAT から派生した GNAT を用いて闕下単純接触が対象の好意度へ及ぼす影響を検討した。この研究では接触方法と接触対象の要因の効果を分析した。その結果、多面的接触は単純接触効果の強度、累積的接触は効果の持続性に影響を及ぼし、さらに単一接触よりも多面的接触の方が有意な効果が示された。藤田・沖林 (2013) では GNAT を用い、単純接触による刺激の違いが潜在的な快・不快意識へ及ぼす影響を検討した。嫌悪対象としてヘビ画像を使用し、嫌悪画像そのものまたはそれに関連する画像への接触のうち、どの接触が嫌悪対象への嫌悪意識低減に効果があるのかを検討した。その結果、接触対象の主効果はみられなかったが、GNAT においてヘビ画像と快カテゴリが組み合わせられた本試行においてのみ接触対象への有意な効果が得られた。このことから、刺激提示の仕方が潜在的認知に影響を及ぼす可能性が考えられる。今後も条件や手続き等を検討し、更なる追及を試みたい。また、従来 GNAT の測定は個別で行われることが多いが、藤田ら (2013) では集団形式で実施した。精度や手続きに関しては今後も検討の余地があるが、実験を通してある程度正確なデータを得ている為、GNAT は集団形式でも実施が可能な手法であると考えられる。

近年の研究動向

近年では、潜在的処理の社会的プロセスがあらためて注目されるようになっている。川上・吉田 (2013) では、社会的階層に対する潜在的なステレオタイプ処理に対する問題意識 (Smith, Dijksterhuis, & Chaiken, 2008; Zevrowitz, White, Wieneke, 2008) に基づき、闕下単純接触による潜在的集団評価の形成について検討を行っている。単純接触させる刺激の社会的階層が

異なる刺激の割合を操作した場合、異質な階層の刺激を70%提示した場合、最も閾下単純接触効果が生じることが明らかとなった。IATは、本来変化が生じにくい社会的階層に対する潜在的態度を測定するために開発された手法であるが、近年は、このような潜在的態度に対する効果的な変容を生じさせる介入に関する研究も行われるようになってきている（川上・吉田，2013；沖林・藤木，2012；沖林・藤木，2013）。

謝 辞

本研究は、科研費基盤研究費 A 研究課題番号：23243071「21世紀市民のための高次リテラシーと批判的思考力のアセスメントと育成」研究代表者：楠見孝（京都大学大学院教育学研究科教授）に一部助成を受けて行われました。ここに感謝を記します。

本研究は、科研費基盤研究 C 研究課題番号：24530825「高次リテラシーとしての批判的読解力のアセスメントと教育実践」研究代表者：沖村 洋平 山口大学教育学部准教授に一部助成を受けて行われました。

引用文献

- 相川充・藤井勉（2011）. 潜在連合テスト（IAT）を用いた潜在的シャイネスの測定の試み 心理学研究、82, 41-48.
- Asendorpf, J. B., Banse, R., & Mücke, D. (2002). Double dissociation between implicit and explicit personality self-concept: The case of shy behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 380-393.
- Cvencek, D., Greenwald, A. G., & Meltzoff, A. N. (2012). Balanced identity theory: Review of evidence for implicit consistency in social cognition. In B. Gawronski & F. Strack, (Eds.), *cognitive consistency: A fundamental principle in social cognition* (pp. 157-177).
- Evans, J. St. B.T. (2003). *In two minds: Dual process accounts of reasoning*. Trends in Cognitive Sciences, 7, 454-459.
- 藤田理恵・沖林洋平（2012）. 接近・回避の身体的動作の反復が潜在的認知の変化に及ぼす影響—潜在連合テストによる測定— 山口大学教育学部研究論叢, 62, 87-94.
- 藤田理恵・沖林洋平（2013）. 単純接触における刺激の違いが潜在的認知に及ぼす影響—GNATを用いて— 山口大学教育学部研究論叢, 62, 87-94.
- Greenwald A. G., Nosek B. A., Banaji, M. R.. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*. 2003; 85: 197-216.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. K.L. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- 川上直秋・吉田富二雄（2011）. 閾下単純接触の累積的效果とその長期持続性 心理学研究, 82, 345-353.
- Lane, K. A., Banaji, M. R., Nosek, B. A., & Greenwald, A. G. (2007). *Understanding and using the Implicit Association Test: IV. What we know (so far)* (Pp. 59 - 102). In B. Wittenbrink & N. S. Schwarz (Eds.). *Implicit measures of attitudes: Procedures and*

- controversies. New York: Guilford Press.
- Lavy, E., Van Oppen, P., & Van Den Hout, M. (1994) .Selecting processing of emotional information in obsessive compulsive disorder. *Behaviour Research and Therapy*, 32, 243-246.
- 沖林洋平・藤木大介 (2012) 協同的読解が批判的読解に及ぼす影響 中国四国心理学会第68回大会 中国四国心理学会論文集, 45, 73.
- 沖林洋平・藤木大介 (2013) 協同的読解が批判的読解に及ぼす影響(2) 中国四国心理学会第69回大会 中国四国心理学会論文集, 46, (印刷中) .
- 尾崎由佳 (2006) . 接近・回避行動の反復による潜在的態度の変容 実験社会心理学研究, 45, 98-110.
- Slovan, S. A. (1996) .The Empirical Case for Two Systems of Reasoning. *Psychological Bulletin*. 119(1), 3 -22
- Stanovich, K. E. (2004). *The robot's rebellion: Finding meaning in the age of Darwin*. Chicago: University of Chicago Press.
- Teachman, B. A., Cody, M. W., & Clerkin, E. M. (2010) .Clinical applications of implicit social cognition theories and methods. In B. Gawronski & B. K.Payne (Eds.), *Handbook of implicit social cognition: Measurement, theory, and applications* (pp. 489-521) .New York: Guilford Press.